

年版から 1831 年版への Caroline 像の書き換えが全体に与える影響については、両者とも特に論じていない。Mellor, pp. 115-126, Poovey, p. 134 参照。Kate Ellis は男女の生きる世界が分断されていることが Victor のような人間を作る原因となり、それが怪物を作り出す結果となったと捉えている。この場合は Caroline の変更も、理想化ではなく、ブルジョア家庭の閉鎖性批判を強めるものと考えられるだろう。Ellis, pp. 129-132 参照。

- (6) Ellis も Caroline が貧農の中から Elizabeth だけを選び出した行為の背後にあるイデオロギーについて論じている (Ellis, pp. 130-131)。また人造人間は抑圧された欲望と感情の “objective correlative” と捉えている。しかしこの二者の関連については指摘していない (同上, pp. 136-137)。
- (7) Muriel Spark, *Child of Light: A Reassessment of Mary Wollstonecraft Shelley* (Norwood Editions, 1977), pp. 141-143 参照。
- (8) Mellor, p. 121 参照。
- (9) Sandra M. Gilbert と Susan Gubar は、物語の下敷きの一つとなっている Milton の *Paradise Lost* の世界秩序の中では、人造人間は Adam 的、Satan 的である以上に、Eve 的な存在であると論じている。ただし、Elizabeth と人造人間の類似性についての指摘はない。Gilbert and Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven: Yale University Press, 1979), pp. 213-247 参照。
- (10) Poovey, p. 135 参照。
- (11) Butler が World's Classics 版 *Frankenstein* に付けた Appendix B, p. 199 を参照。
- (12) Mellor, pp. 170-176 参照。
- (13) Poovey, pp. 133-142 参照。
- (14) Mellor, p. 173 参照。

注

- (1) Maurice Hindle 編, Mary Shelley, *Frankenstein: or the Modern Prometheus* (Harmondsworth: Penguin Books, 1992), p. 10。このテキストは 1831 年版に基づいている。誤字が数箇所あるが、入手が容易であることから、以下で 1831 年版に言及する場合は敢えてこのテキストを用い、本文中に (1831) と表記し、ページ数を示す。
- (2) Mary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen* (Chicago; The University of Chicago Press, 1984), pp. 133-142 参照。
- (3) Marilyn Butler 編, *Frankenstein: or the Modern Prometheus, the 1818 text* (Oxford: Oxford University Press, 1994)。1818 年版については、この World's Classics 版を用い、以下に言及する場合は、1831 年版同様、本文中に (1818) と表記し、ページ数を示す。
- (4) Victor と人造人間の関係について論じたものが多い中で、女性像に注目した批評には、例えば Kate Ellis, “Monsters in the Garden: Mary Shelley and the Bourgeois Family”, in *The Endurance of Frankenstein: Essays on Mary Shelley's Novel*, eds. by George Levine and U. C. Knoepfelmacher (Berkeley: University of California Press, 1979), Mary Lowe-Evans, *Frankenstein: Mary Shelley's Wedding Guest* (Twayne's Masterwork Studies, New York: Twayne Publishers, 1993) などのフェミニスト批評的アプローチが見られる。また Mary Poovey, Anne K. Mellor などは改訂の意味についてまとめた議論をしているが、女性像の変化という観点からの議論はあまりなされていない。Mellor, *Mary Shelley: Her Life, Her Fiction, Her Monsters* (New York: Routledge, Chapman & Hall, 1988) 中の “Revising *Frankenstein*” の章を参照。
- (5) 例えば Mellor によれば、Shelley にとってはブルジョア家庭の安定と平和が理想であったので、Caroline 像も、それらを提供してくれる母親像として描かれていると見る。ただし、彼女が敢えなく死ぬこと、そして Victor の夢の中で、Elizabeth が母の死体に変身することなどには、Shelley 自身の抱える不安と共に、ブルジョア家庭の理想に潜む矛盾と限界を読み取っている。また Poovey も、1831 年版で Caroline が理想的な母親像として描かれ、家庭の調和が強調されているとする。ただし 1818

価値観に対して、かなりアムビバレントな見方を提供していると言わざるを得ない。Pooveyが自論で強調した、読者への懐柔の意図は確かにあったかもしれない。当時の読者に受け入れてもらいやすいように、家庭の価値に背くことが同時に社会的・道徳的背信行為になるという教訓物語への衣替えを図ったのかもしれない。しかし、実際にテキストが醸し出す意味は、そのような単純化を拒んでいる。それは1831年版において、ロマン主義的な人間像とヴィクトリア朝的モラルの両方が強調されたことによって、テキスト内部に葛藤を生じているためだと言うこともできるだろう。

ただしここでは、女性人物の書き換えという観点に話を絞ろう。そこでもう一度、先に提出したアレゴリー的な読みが成立するかどうかという問いに立ち返ってみたい。行為の結果だけに目を向けるならば、確かにVictorの体現するエゴイストの罪は、人造人間を世に放ち、平和と秩序と家庭の幸福の暴力による破壊をもたらした。即ち、征服欲に突き動かされる男性原理は暴力と破壊しか生み出さない。それに対して、Elizabethたちの体現する女性原理は自然との共生と愛と平和を育む。このような対照が措定されているのは確かだ。そしてそれが為に、読者はVictorを「家庭の天使」の司る世界の破壊者として、一層罪深い男と見做すことになる。彼の自己中心的な物の見方と行動を、読者は批判的に捉える。

しかしそれだけではない。女性を美化した1831年版は、同時に女性人物の人間としての本性を否定した。「美德の権化」は美德を振りまくに留まらず、人間存在に対して抑圧的なイデオロギー推進の片棒を担いでもいる。それゆえ、エゴイストの罪は繰り返し強調されるにもかかわらず、単純に糾弾されるべきものとはならず、人間の抑圧され切らない自己実現の欲望の発現として、読者の共感をも獲得する。

その意味で、アレゴリーとしての読みが成立するかという問いに対する最終的な答えは「イエス」でも「ノー」でもない。1831年版の改訂で強調された女性／男性の対照によって成立するはずのアレゴリーは、テキスト内部にある、それを突き崩そうとする力によって、遂に完全に成立することを阻まれているのである。

ように、抑圧的、排他的である。両版にある次のような Victor の言葉にナイーブに首肯する読者はいないだろう。

...how dangerous is the acquirement of knowledge and how much happier that man is who believes his native town to be the world, than he who aspires to become greater than his nature will allow. (1818, p. 35/1831, p. 52)

確かに知識欲は、Victor にも人造人間にも幸福をもたらさなかった。この物語では、自然も家庭も自分の心も決して変化しないと信じられる Elizabeth のような女性のみが幸福を感じている。自分の町を全世界と思うような生き方には、家庭を充足した小宇宙と見做して満足する生き方と同じく、知識欲や向上心は認められない。しかし、知識欲や向上心が人間に本質的に備わった欲望と考えられていることは、それを凝縮させた形で見せる人造人間の行動によって示されているのだ。なぜなら、私たちは、人造人間が懸命に言葉を覚え、人間の社会と歴史について理解しようと努めるその姿に、人間のもつべき純粋な精神の輝きと高貴さまでも感じるのだから。つまり「家庭の天使」の価値観は、人造人間のような異形の者や Victor のようなエゴイストを排除するばかりか、人間の根源的な生きる欲望までも抑圧する力となっているのである。

このように「家庭の天使」の価値観は、家庭内において社会の抑圧的な力に加担しているのであるが、それに反抗する暴力的な力の噴出に対しては無力であった。Elizabeth の魅力を以てしても、Victor を手なずけることはできなかつたし、人造人間の破壊的な力の行使を防ぐこともできなかつた。ひとり、またひとりと殺されていく天使のような人物たちは、あまりにも自分たちの生きる世界に満足しすぎていた。彼らの世界は、Victor の“excessive”な欲望も人造人間の抱える排除された者の苦しみも受け入れる余地がなかつた。彼らは、その無邪気さと狭隘さゆえに、Victor や人造人間という、社会からはみ出した者たちの放つ強烈なエネルギーの前に色褪せてしまうのである。

こうして考えてくると、1831 年版 *Frankenstein* は、「家庭の天使」的

独を求める心に同情し、彼が社会に背を向けることを容認する読み方をしていることになる。そのような読者の心的態度は如何にして生まれるのか。最後にこの問題について私の考えを示して、結語としたい。

結 語

1831年版において、Caroline, Elizabeth, Walton, Clerval, そして Victor 像が変化したことによって、Victor の罪はその重心を移動させた。人工的に人間を創造するという、自然の摂理に背いた罪、そして自ら創り出した人間に対する責任から逃れようとした罪、これらは1818年版においても明確に打ち出されていた。だが1831年版では、これらの罪が、元を質せば、家庭に対する背信に帰されるべきものであることが強調される。にもかかわらず、Frankenstein 家の家庭によって体現される価値観が、格別に称揚されるべきものと思われたいのは何故か。Victor の欲望と行動を、否定的に見せるに十分な説得力と魅力を持たないのは何故か。

幾つかの理由が考えられる。

一つには、女性たちが余りにもステレオタイプ化されて、個人としての魅力に乏しいこと。彼女たちは現実離れしてしまい、「家庭の天使」のパロディにもなりかねない。読者の共感の対象となるのは、そんな彼女たちではなく、外界との、そして自我との葛藤に苦しむ Victor であり、人造人間なのである。

また、Victor の苦悩と孤独の深さは、家庭への背信が強調されることによって、より切実に感じられるということがある。もしも Elizabeth たちの奉ずる価値観に完全に支配された人生を送るとすれば、それはまるでセイタンのいない世界のように、何事も起こらず、全てが平穏で、単調で、何とも退屈な生となるであろう。魅力的な人間と語るべき物語は、その縛りを解くところから生まれる。

さらに、1818年版の写実的描写ではさほど目立たなかったが、極端なステレオタイプ化によって、女性人物の体現する価値観に内在する矛盾が、顕在化することとなった。「家庭の天使」の価値観は、I・II章で論じた

例えば、人造人間と出会うことになるアルプスへの旅は、1818年版では家族旅行だが、Victor 一人で出かけていくことに改められた。また Justine の裁判の件でも、1831年版の加筆部分で、Victor は罪の意識から逃れようと、自らに対して次のように言い繕う。

My tale was not one to announce publicly; its astounding horror would be looked upon as madness by the vulgar. Did any one indeed exist, except I, the creator, who would believe, unless his senses convinced him, in the existence of the living monument of presumption and rash ignorance which I had let loose upon the world? (1831, p. 77)

ここには自己の行為に対する罪の意識と共に、社会との連帯を拒絶する姿勢が窺われる。1831年版において、Victor の苦悩はエゴイストの苦悩となる。

それでもなお読者は Victor に対して共感を覚える。それは Butler が言うように、1831年版において Victor が「輪郭が柔らかくなり、感じの良い人物になったから」という理由ではなく、読者が、エゴイストの苦悩そのものに共感するからであろう。Victor は確かに家族と友人の愛を裏切った。彼らが惜しみなく与える愛に背を向けた。しかしそれで平気だったのではない。彼は背信の生き方に自ら苦しんだことを切々と語り、同時に運命を強調することによって、そのように生きざるを得なかったと訴え、自己を弁護する。1831年版での書き換えによって、Victor は、より自己中心的に、より孤独に、より罪深く、そのためにより複雑で、苦悩に満ちた人間になったのである。そしてそんな Victor に読者は反発とともに共感をも感じるのである。

しかし、ここで考えてみなければならないのは、Victor が背を向けた社会の価値観を、読者が全面的に受け入れていたならば、Victor に対して、それほど共感を覚えることなどなかったのではないかという点である。彼は単に裏切り者として弾劾されるべき存在でしかなかったかもしれないのだ。とすれば、Victor に共感を覚えるからには、読者の側で、彼の孤

た Waldman 教授の化学賛美の演説に対する Victor の反応を見てみよう。これも加筆された部分だが、教授の言葉は、Victor にとって “words of fate” となったと語られているので、運命の犠牲者としての Victor 像が強調されたとする読み方の場合に引き合いに出される⁽¹⁴⁾。

しかしそこで、“So much has been done, exclaimed the soul of Frankenstein,— more, far more, will I achieve” (1831, p. 47) と、多少芝居がかった高揚感を伴って叫ぶ Victor の姿は、運命の犠牲者ではなく、‘mad scientist’ そのものである。

この例ばかりでなく、Victor が「運命」や「偶然」を口にする時、読者は彼の人生が実際に運命や偶然に弄ばれているという感を強くするわけではない。ゴシック的興趣は増すとしても、Victor が運命の悪戯の犠牲者に変化するとは思えないのである。頻出する「運命」は自己の倫理的責任を転嫁させたものにすぎないからだ。

もうひとつの例として、守護天使の力によって錬金術から暫し離れることができたという、先ほどの引用に戻ってみよう。そこから顕になるのは、行動の動機を自己の意志に根ざすものとして説明せずに、外在的な力に影響されたと説明する Victor の語りの傾向である。“The guardian angel” と、それに類する語の頻用も、彼のそのような心的態度の現れと考えられる。同様に彼を破滅に導いたのは、彼自身の意志でも抑制のきかない欲望でもなく、“destiny” であり “the angel of destruction” であると、1831 年版の Victor は語る。しかし、運命というものが、この小説で Victor を弄ぶ人間の知を越えた力として作用することはない。Victor 自身が野心の虜となり、それに突き動かされることを、自ら運命と呼んでいるにすぎない。つまり、自身の内にある原因を、運命という言葉で外在化させていると考えられるのである。Victor は、自らを宿命に縛られた悲劇の人として提示したいのだ。このような論法は、Butler の言う宗教的意識の発露などではなく、また Mellor のいう宿命論でもなく、韜晦と呼ぶべきであろう。

そこで私見を述べれば、1831 年版の Victor が、より同情に値する人物になったとすれば、それは受け身的な犠牲者になったからではなく、1818 年版に比べて一層孤独になり、自己の意識の内に沈潜するからではないか。

実のところ、書き換えによって Victor はより同情を勝ち得るべき人物になったという意見が目立つ。Butler は、前に挙げたリストに明らかのように、Victor の人物像が、より柔和になり、宗教的良心も付加されたと考える。そして、科学者としての意志は運命への服従に取って代られたとする。また Mellor も、Victor が語りの操作のために運命という概念を持ち出しているとする解釈があることに言及しながらも、自身はその考え方を退けている。1831 年版で、Victor の行為に運命の力が強く作用するように改められたのは、Shelley 自身が運命論的人生観に傾いたことの表れだと考えるからである⁽¹²⁾。

Poovey も Mellor 同様、*Frankenstein* を、主に作者 Shelley の生き方と関連づけて論じている。その議論の中心は、Shelley が、女でありながら作家として自己表現することの反社会性に抵抗を感じ、作品を社会に受け入れられるものにしようと腐心したというもので、改訂も彼女のこのような意図の表れだと考える。テキストに表現されたものを、あくまでも作者 Shelley の創作心理と結びつける Poovey は、1831 年版において「運命」が繰り返し強調されることについても、その理由を作者の読者に対する懐柔の意図にあるとしている。Victor の逸脱行為が彼の意志によってではなく、彼には制御できない力の作用によって導かれたと変更することによって、Victor もまた犠牲者であると読者に感じさせる。1831 年版の序文で Shelley は、多くの読者を不気味がらせたこの小説を自分の子供に喩えているのだが、Poovey によれば、女だてらにそのような小説を書いた Shelley と、人造人間の親である Victor は部分的に重なる。そこで、この受け身的な犠牲者像への変化は、Shelley が 1818 年版執筆時のスキヤングラスな自己像を、世間に受け入れられやすい女性像にすり替えようとする意図の反映でもある⁽¹³⁾。

このように改訂についての議論では、1831 年版の Victor 像は運命の犠牲者へと変質されている、そして改訂による一番大きな変化はそこにある、と論じられることが多い。しかし敢えてもう一度考えてみたい。Victor が「運命」を口にする度に、本当に読者は彼が運命に翻弄されていると信じられるだろうか。

例えば、Victor を生命の神秘の解明へと突き進ませるきっかけとなっ

ついて詳しく説明してやり，フランクリンばりの実験までやってのける。だが1831年版では，落雷の原理を説明するのは，客人となっていた物理学者であり，父の姿は消えてしまった。しかも Victor の目を開いたのは，この物理学者でもない。その時彼を導いてくれたのは「守護天使」だったのであり，「彼女」のおかげで，魂の静謐と喜びを得ることができたとして Victor は語る。ここで読者は「守護天使」という呼び名が Caroline に冠されていたこと，そして Elizabeth も天使に喩えられていることを思い出す。この場面では Frankenstein 家の女性が登場することもなし，彼女等が直接救いの手を差し伸べたわけでもないにもかかわらず，Victor の幸せは，「家庭の天使」によってのみ守られるものであることが示唆される。

When I look back, it seems to me as if this almost miraculous change of inclination and will was the immediate suggestion of the guardian angel of my life — the last effort made by the spirit of preservation to avert the storm that was even then hanging in the stars, and ready to envelope me. Her victory was announced by an unusual tranquility and gladness of soul, which followed the relinquishing of my ancient and latterly tormenting studies. It was thus that I was to be taught to associate evil with their prosecution, happiness with their disregard. (1831, p. 41)

Marilyn Butler はこの部分に，Victor の “religious consciousness” が現れていると見做し，1831年版では Victor の人物像にキリスト教的な良心が付け加えられたと指摘する⁽¹¹⁾。しかし，テキストの文脈からみて，この部分を Victor の宗教心の現れと判断することができるだろうか。確かに “angel” という語は度々使われるが，それをもってただちに宗教心の証とすることはできまい。ここでの “angel” は，やはり家庭における女性の影響力を示唆するものと捉えるべきだろう。

さてこのように，1831年版においては，Victor の罪の意味合いが変化し，支配への欲望が強調されたのだが，これらに関連して問題となるのは，彼が読者の共感を得る人物に変化したかどうかという問題である。

It was the secrets of heaven and earth that I desired to learn. . . .
(1831, p. 37)

. . . a fervent longing to penetrate the secrets of nature. (1831, p. 39)

The most learned philosopher knew little more. He had partially unveiled the face of Nature, but her immortal lineaments were still a wonder and a mystery. He might dissect, anatomise, and give names; but, not to speak of a final cause, causes in their secondary and tertiary grades were utterly unknown to him. I had gazed upon the fortifications and impediments that seemed to keep human beings from entering the citadel of nature, and rashly and ignorantly I had repined. (1831, p. 39)

これらの加筆によって繰り返し強調されるのが、Victor の飽くなき欲望であるのは言うまでもない。ただ、この欲望は、科学的関心といったものから男の支配欲へとすり替えられている。自然は古来、女性として表象されてきた。また男になびかない女性はしばしば守りの堅い城砦に喩えられてきた。これらの加筆では、自然があたかも男を拒む女のように見做され、それが Victor の欲望を掻き立てる。

この後に続く Victor の学問への言及においても、加筆によって力点が移動した。1818 年版では、Victor が蒸留法や蒸気の力などに興味を持ったなどと、具体的に関心の対象が書き込まれているが、1831 年版ではそれらは削除され、Victor の知識に対する姿勢の方に焦点が合わされる。と共に、ここでも隠喩が目立つようになる。両版の相違をしてみよう。

Victor はひとり錬金術の世界にのめり込んでいくのだが、その世界から一時的に離れた時期があった。彼は 15 歳の時、雷が樅の老木を打ち砕くのを目撃する。彼が、一時でも錬金術から心を離すことができたのは、電気についての科学的説明を聞いて、錬金術の蒙昧に気づいたからである。1818 年版では、それは父のおかげということになっている。彼は電気に

動することは、当然のこととして受け入れる見方なのである。

1831年版の Victor と Elizabeth の関係は、このようなイデオロギーに根差している。Victor は抱くべきでない欲望を抱いたから罪深いのではない。彼が道を踏み外すのは、家庭に背を向けることによって女性の影響力を拒んだことに始まる。それによって彼の欲望は、Clerval のように善へと導かれる道を閉ざされたのだ。

1818年版から1831年版への改訂によって、Victor の罪が、一科学者の倫理的背任の罪から、家庭の調和に背を向けた男の罪へと大きく力点を移すのは、このような女性／男性の対照を強調したことが原因であろう。つまり Victor は Elizabeth が美德の光を投げかける家庭という小宇宙から飛び出して自らの欲望を追求しようとした。また人造人間の存在に怯えながらも、それを家族に隠したままで、連帯も助けも求めなかった。1831年版では、この Victor の自己中心性こそが彼の罪ということになる。

Victor の科学者としての態度についても、倫理的責任というテーマ自体は両版において重要であるが、1831年版では科学への関心自体から力点を移す。幼い頃から Victor の関心は、自然の神秘を解き明かすことにあったのだが、以下に、この点に関する1831年版の加筆部分を並べてみよう。

While my companion [Elizabeth] contemplated with a serious and satisfied spirit the magnificent appearances of things, I delighted in investigating their causes. The world was to me a secret which I desired to divine. Curiosity, earnest research to learn the hidden laws of nature, gladness akin to rapture, as they were unfolded to me, are among the earliest sensations I can remember. (1831, p. 36, [] 筆者)

事物の姿形の美しさを観賞することに満足している Elizabeth との対比が明確に出ている。また、ここでも次に挙げる加筆部分でも、自然は神秘的な他者として、暗に男性にとっての女性と類比される。

いる (“a man is blind to a thousand minute circumstances, which call forth a woman’s sedulous attention”, 1831, p. 149)。このように、1831年版の登場人物たちを見れば、女性は男性によって家庭内に庇護されねば幸せな人生を送れないが、また男性も女性の美徳なくしては、全うな生き方ができない。前章の最後に発した問い、即ち男性人物は自己拡大の欲望を体現し、女性は美徳を体現するというアレゴリーがこの物語において成立しているか、という問いの答えは、その意味で「イエス」なのである。

V

それでは、Victor 像はどう変わったのか。また、Elizabeth との関係はどう変わったのか。その関係について考えるために、まず次のような疑問から出発したい。即ち、前章で見た男女の関係は、一見、与え与えられの良好な相互関係のように思われる。しかしその背後にあるイデオロギーは、果たして男女の対等な関係を促すような類のものだろうか。

Mrs. Saville, Caroline, Elizabeth が家庭に留まり、身近な男性たちに対して道徳的影響力をふるうのに対し、男性の人物たちは自らの欲望に従って生きようとする。両者の対照は、1831年版では男性・女性一般の対照としてよりはっきりと現れることとなった。このような対照が成立するためには、次のような男女観が前提として存在していなければならないだろう。即ち、理想的な女性はその本性において十全であり、自ら欲望を持つ必要がないのに対して、男性はその本性において未知の世界への欲望を持つ。それゆえ、女性はその本性に従って生きる限り、人生に不足するものはなく、現在のままで幸福であるはずだが、男性はその野心ゆえに欠如感と自己への没入の性向を持っているので、女性からの愛情と道徳的影響力を必要とする。

この考え方に従えば、女性は欲望を持つことがないはずであり、男性は欲望を持つのがその本来の姿だということになる。これは一見、女性の方を、より高貴な存在と見做しているようであるが、裏を返せば、女性が自ら欲望を持つことを認めないのであり、対照的に、男性が欲望に従って行

taken of its society, the means of materially assisting the progress of European colonisation and trade. (1831, p. 153)

文学を文学として愛していたはずの青年が、1831年版では、東方の文学から得た知識をヨーロッパの植民地政策に役立てようとする。このような Clerval 像の変更をもたらした要因は、一体何だったのか。急速に進んでいたヨーロッパの植民地拡大という事実が、ここに影を落としていると見ることもできる。だが、たとえ Clerval が植民地政策に加担することが、当時の青年の抱く志として納得できるものであるとしても、1818年版の Clerval 像が持っていた一貫性を壊してまで、Clerval の野心を書き加える必要があったのだろうか。写実性を求めてのこととは思われない。彼の野心への言及は、いかにも取って付けたようで、文学青年的な人物像とは齟齬をきたす。それなのに、Victor と人造人間の物語の中で、さして重要な役割を担っているようにも思われない Clerval 像に、わざわざ手を入れたのは何故か。

作者の意図を特定することはできないが、少なくとも、この書き換えによって起こる読みの変化に関しては、次のようなことが考えられるのではないか。即ち、本来 Victor と対照的な性格の Clerval といえども、男である限り、征服し、支配したいという野心、外へ自我を拡大しようとする欲望を持っていることが、これらの加筆によって示された。その点で、Clerval 像の変化も他の人物たちの変化に沿うものである。ここで重要なことは、加筆によって強調された Clerval の性向は、Elizabeth の影響を受けてはじめて善に向かうことができるという点である。

Clerval は、このように、当初 Victor と対照的な人物としての機能のみを与えられていたものが、Victor の性向を反復する機能をも与えられた。それによって Victor の物語が、Victor 個人の物語から男の野心の物語へと、質的に変化するのに手を貸している。Clerval 像がわざわざ書き換えられた意義は、この辺りにあるように思われるのだ。

Walton も Clerval も、身近な女性からの影響があってはじめて徳性を発揮することができる。また 1831 年版の加筆では、男というものは女の心遣いに支えられていることに気づかないものだと、Victor に語らせて

への思い遣りの感情を失わずに済んだ。同様に、Clervalも Elizabeth がいなければ、正しい人生の道から外れていたかもしれない。Clerval については 1831 年版で 3 箇所、目立った書き換えがある。彼は当初から、Victor と対照的な人物として設定されていた。即ち、他者との積極的な交わり、献身的な友情、自然への穏やかな観照の態度を体現する人物である。しかしながら 1831 年版では、Victor との共通性も付加されている。

まず幼少の頃について、Clerval は、たわいない空想の世界に喜びを見出す文学好きの少年ということになっている。1831 年版でもそれは変わらないのだが、ただ、“He loved enterprise, hardship, and even danger for its own sake” という一文が加えられている (1831, p. 36)。冒険好きの少年についてならば不自然な表現ではない。ただし、テキスト冒頭で強調された Walton の性向と同じ表現が用いられていることは無視できない。

またこれに続く箇所は、既に Elizabeth の影響力について論じた際に引用したが、そこでも “his passion for adventurous exploit”, “his soaring ambition” という、1818 年版の Clerval にはない側面が加えられている (1831, p. 38)。

次の目立った変更は、青年になってからの Clerval が、Victor の学ぶ大学にやってくる場所である。1818 年版では、東方の文学を愛するがゆえに、その国々の言語を学びたいというのが、来訪の動機であるが (1818, pp. 49-50), 1831 年版ではその精神と相容れないように思われる企業心が明らかになっている (“Resolved to pursue no inglorious career, he turned his eyes toward the East as affording scope for his spirit of enterprise”, 1831, p. 67)。Clerval のこの自己拡大の欲望は、Victor が女人造人間を創るために訪れる英国での Clerval の行動に端的に示される。1818 年版の Clerval は、異国の文化や生活習慣に魅せられ、英国の詩人たちと親しく付き合う文学青年に仕立てられているが、1831 年版での彼は、もっと活動的である。

His design was to visit India, in the belief that he had in his knowledge of its various languages, and in the views he had

He is, indeed, of so amiable a nature, that he will not hunt (a favourite, and almost the only amusement here), because he cannot endure to spill blood. He is, moreover, heroically generous. (1818, p. 9)

ところが、1831年版では心優しきは Walton のものであって、それは姉の影響によって培われたことになっている。自分が姉によって心優しい人間に育てられたので、同様の性質をもった人間の価値がわかるというのである。

A youth passed in solitude, my best years spent under your gentle and feminine fosterage, has so refined the groundwork of my character that I cannot overcome an intense distaste to the usual brutality exercised on board ship: I have never believed it to be necessary, and when I heard of a mariner equally noted for his kindness of heart and the respect and obedience paid to him by his crew, I felt myself peculiarly fortunate in being able to secure his services. (1831, p. 18)

Mrs. Saville の声を読者が聞くことはない。しかし彼女は Walton が孤独な状況に置かれている間じゅう、手紙を書くという形で絶えず向き合い、頼る存在として、Walton にとって重要な人物である。Walton の手紙は、彼が氷の海に閉じ込められてからは、姉に直接語りかけるというよりも、日記風の記述になっていくが、それでも最終的には姉に向けて発信することを目的としている点で、姉との絆の証と言えるだろう。Walton は Victor と同様の危険な性向を持ちながら、結局は Victor のように墮ちていくことはなかった。それは、彼が姉との絆を保ち続けることのできる人物であったからだという読み方ができる。このような読み方を 1831 年版の書き換えは促しているのである。

Walton は、姉への手紙を書き続けることによって、Victor が断ち切った家族との絆を辛うじて保ち続け、そのために、姉によって育まれた他者

... when I reflect that you are pursuing the same course, exposing yourself to the same dangers which have rendered me what I am, I imagine that you may deduce an apt moral from my tale. ...
(1831, p. 29)

この加筆によって、Walton と Victor のパラレルな関係が明確化され、同時に彼らの欲望が危険なものであることが一層はっきりした。Mary Poovey は、1818 年版から 1831 年版への変化の一つを、“realistic narrative” から “allegory” への変化と捉えた⁽¹⁰⁾。ここで語りが、Victor の物語を教訓物語であると殊更に強調しているのも、その変化を裏付けるものと言えるだろう。確かに、Elizabeth や Caroline の人物造型をみても、1831 年版の書き換えにおいては、写実性を失っている。「まことしやかさ」を捨ててまでも、当時の社会で理想とされた女性像を描いているとしか思えない。また Walton 像についても、この章で指摘した書き換えの特徴からわかる通り、彼の個性ではなく、男の持つ未知の世界への征服欲が前面に出ることになった。

そうだとすれば、Caroline と Elizabeth は、「美德」の権化であるという、アレゴリー的な読み方が成立するのだろうか。それに対して、Victor は男一般の犯す「欲望の罪」の権化であると言い切れるのだろうか。

IV

前章の最後に提起した問いの答えは、とりあえず「イエス」である。その理由を、Walton と Clerval が女性から受ける影響に焦点を当てて、論じることしよう。

まず、Walton と姉の Mrs. Saville の関係について。Walton にとって姉の存在はどのような意味を持っているのだろうか。Letter II で、Walton は副船長として雇った男のことに触れているが、1818 年版では、その人物自身の心優しさについて語っている。

transmit over the elemental foes of our race. (1831, p. 27)

Letter IIIの加筆部分同様、自然は敵であり、征服すべきものとされる。また知識の獲得は力をもたらすものと捉えられる。その力を得るためならば、命を犠牲にしてもよいという Walton の考え方は、姉に繰り返した言葉を完全に裏切っている。

そればかりではない。この Walton の言葉は、後の Victor の物語のテーマを導く重要な役割も果たしている。彼の自然観、知識への飽くなき欲望、生命の軽視、これらは Victor の行動の動機をなすものである。そして、人造人間の創造は、これらに潜む危険が形となって現れたものとも考えられるからである。上の引用部分に続いて加筆されたところをみてみよう。

As I spoke, a dark gloom spread over my listener's countenance. ... I posed; at length he spoke, in broken accents — 'Unhappy man! Do you share my madness? Have you drunk also of the intoxicating draught? Hear me — let me reveal my tale, and you will dash the cup from your lips!' (1831, p. 27)

何とも大時代がかった物言いである。だが、この勿体ぶった表現も、Victor の物語に対する読者の期待をあおるためのゴシック小説的趣向と考えられる。それはともかく、ここで Victor が自分の過去の行為を定義するのに用いている“madness”は、Victor の物語に対する一定の見方を誘導する一語となっているが、これも 1818 年版にはない。前掲の Walton が語る一節と、この Victor に関する一節が加えられることによって、Walton と Victor が似ていること、それも行為の類似性ではなく、1831 年版で強調されているその危険な性向において似ていることを、いやが上にも強く印象づけることになった。

Victor の物語は、Walton にとって戒めとなるべき物語であることが、上に取り上げた加筆によって明白になった。この点は、8月19日付けの手紙の書き換えでも念を押している。

そして読者は、この件を読むことによって、Walton の精神に潜む危険な傾向をより明確に意識させられることになる。

もう一つ、この加筆部分に特徴的なことは、人間の意志の力に対する信頼と、自然はその意志の力に屈すべきであるという考え方である。自然はここでは“untamed yet obedient” というように、支配征服される対象と見られている。Walton の抱く野心とは、自然を征服することによって自己を拡大しようとする野心と言ってよいだろう。この考え方によれば、人間は自然の一部ではなく、自然の諸力と対峙する存在である。そして、自然への憧れは、ただその懐に抱かれないという欲望ではなく、その秘密を手に入れることによって支配したいという欲望となる。これは言うまでもなく、Victor の自然への態度に通じる。

同趣旨の書き換えは、Letter IV の 8 月 13 日付の記述にも見ることができ、Letter IV は、Walton が Victor に出会ってから書かれている。その時点で、彼は氷海に閉じ込められて身動きが取れなくなっている。従って手紙も姉の元へ届く当てもなく書き続けられる。そのような状況設定で、Walton の手紙は、姉を安心させるという意図よりも、Victor という人物の観察と、自分の感想の記録という趣を強める。1818 年版の 8 月 13 日付の記録では、Walton が Victor に北極探険の計画を話したことが、たった一行で語られ、またそれを聞いた Victor も、実際的な助言をしたにすぎない (1818, p. 16)。この部分は大した意味も首尾一貫性もなく書かれていると言わざるをえない。それが、1831 年版の同部分では、Walton がそれまでの手紙で姉に書き記した懐柔の言葉とは裏腹に、燃え立つ野心を剥出しにして計画を語ったことが窺える。

I was easily led by the sympathy which he evinced, to use the language of my heart, to give utterance to the burning ardour of my soul; and to say, with all the fervour that warmed me, how gladly I would sacrifice my fortune, my existence, my every hope, to the furtherance of my enterprise. One man's life or death were but a small price to pay for the acquirement of the knowledge which I sought for the dominion I should acquire and

りでなく、後の Victor の物語に対しても、読者の反応を特定の方向に導くように作用していると思われる。

Walton は Victor と同様、野心を抱く男と設定されているが、1831 年版では、それが同種の野心であることが強調される。それを端的に表すのが、Letter III の加筆部分である。この手紙は 1818 年版では、姉の Mrs. Saville に宛てて航海の無事を知らせる短い手紙にすぎない。その手紙を Walton は Letter II 同様、姉への心遣いと愛情を表す言葉で結んでいる。

Adieu, my dear Margaret. Be assured, that for my own sake, as well as yours, I will not rashly encounter danger. I will be cool, persevering, and prudent. (1818, p. 11)

これだけならば、Letter III は読者にとっても、北極への航海に出発した事実を告げると共に、重ねて姉を安心させるための手紙だという意義しか持たないだろう。ところが、1831 年版では上の引用部分に続けて次のような一節が加えられた。

But success *shall* crown my endeavours. Wherefore not? Thus far I have gone, tracing a secure way over the pathless seas: the very stars themselves being witnesses and testimonies of my triumph. Why not still proceed over the untamed yet obedient element? What can stop the determined heart and resolved will of man? (1831, p. 21, イタリクスは原文通り)

すぐ前の段落にある “I will be cool, persevering, and prudent” という言葉が、ここでは一挙に覆され、自己の野望に没入して冷静な判断力を欠いた人間としての Walton 像が浮かび上がる。この部分が付加されることによって、前段落の言葉は、単に姉を懐柔するために用いられたにすぎないと感じられるようになる。1831 年版の Walton の手紙は、姉への愛情という他者へ働く力と、自己の野望への没入という他者への愛情とは反対の方向に働く力の両方が、そのまま相矛盾する発言の中に顕になっている。

る。それは、家庭から離れて自己を拡大しようとする Victor の欲望を、罪深い欲望であると責める力を持ち、彼を自責の念に駆り立てるのだ。

Victor がその欲望ゆえに味わうことになる苦悩は、家庭の平和のうちに生きる者ならば味わうことのなかった苦悩である。Elizabeth の無邪気な言葉は、既に人造人間を創ってしまった Victor にとっては、自分の苦しみを到底共有してはもらえないと思わせる、無垢な者の残酷さに満ちている。

すなわち物語は、このように変わるのだ。Elizabeth の司る家庭の平和が強調されることによって、Victor の罪は一科学者の犯した罪という意味合いが薄れ、家庭に対する、そしてそれが代表する社会に対する裏切りの罪という色合を濃くする。それと同時に、Victor が、平和と満足しか知らないそのような家庭には戻ることのできない人間になってしまったことも印象づけられる。Victor の孤独は決定的なものとなるのだ。

以上、考察してきたように、1831 年版での Elizabeth 像は、1818 年版にあった主体性を失い、家庭の天使的女性像のステレオタイプへと変質している。それによって、Victor の野望と苦悩の性質がよりはっきりとした輪郭を与えられる結果となった。

III

これまでの考察で、加筆修正によって、美德の体現者が Alphonse から Caroline と Elizabeth へと移動したこと、そして、彼女たちのステレオタイプ化された描写が Victor の物語全体の意味に与える変化について考えてきた。この章では、テキスト冒頭の Walton についての大幅な書き換えについて検討したい。彼についての変更も女性人物の書き換えと軌を一にするとと思われるからである。

Walton は、この小説の中心をなす Victor の物語には属さないが、外枠の語り手としての役割を担っている人物である。彼が語る部分は多くはないが、冒頭に配されて、Victor の物語を導入する重要な役目を果たしている。1831 年版でこの部分に施された加筆は、Walton 像を変えたばかり

Frankenstein 家の者全員を指す代名詞 “we” が主に使われている (1818, pp. 44-45)。それに対し、1831 年版では “I” が多用され、Elizabeth 自身が心配している様子を中心になっているし、おまけにコケティッシュな女らしさも付加されている (1831, p. 62)。それに続いて、家族の近況を報告する件の異同も特徴的である。1818 年版での Elizabeth は、Frankenstein 家の次男 Ernest の将来について、臆せずに自分の意見を述べている。これは先に挙げた Butler のリストの 8 でも指摘されていたことだが、ここで Elizabeth は法制度批判めいたものを披露している。この批判は、この版では後に Justine の裁判の際にもっとはっきりと表明されることになる。Elizabeth はここでは、女としての限定された社会的役割など意識しないで、自分の考えを述べる少女である。

ところが、1831 年版ではこの件は抹消され、代わりに Elizabeth は家庭の平和と秩序から生まれる幸福を説く。彼女が Victor とは対照的に、自己拡大の欲望を持たず、家庭での日々の営みに満足していることが強調される。1818 年版で、Alphonse から、そんなに弁が立つなら自分で弁護士になればよいのにと、からかわれた Elizabeth とは大違いである。

The blue lake, and snow-clad mountains — they never change; and I think our placid home and our contented hearts are regulated by the same immutable laws. My trifling occupations take up my time and amuse me, and I am rewarded for any exertions by seeing none but happy, kind faces around me. (1831, p. 63)

申し分なく平和な生活の図だ。だが変化を求める心にとっては、この上なく抑圧的な生活であろう。それは、ミルトンの描くセイタンにとって、天国がこの上なく抑圧的であったのに似ている。神の声を聞く度にハレルヤを歌って讃える、従順な天使たちにかしずかれた、唯一絶対の神の支配する国。語りの中で自らをセイタンになぞらえる Victor にとっても、そんな神の国は耐えられなかつただろう。Elizabeth が司る平和な家庭は、一見何の支配力も持たないようであるが、家庭の価値の絶対性を誇ることによって、そこからはみ出ようとする欲望に対して、無言の糾弾を行ってい

— could aught ill entrench on the noble spirit of Clerval — yet he might not have been so perfectly humane, so thoughtful in his generosity — so full of kindness and tenderness amidst his passion for adventurous exploit, had she not unfolded to him the real loveliness of beneficence, and made the doing good the end and aim of his soaring ambition. (1831, pp. 37-38, イタリクス筆者)

女性の影響力についての何とも現実離れした記述と言わざるを得ない。写実性が欠如しているために、この部分は Elizabeth の性格描写とはならず、より一般的な男性と女性の性向の違いの記述となっている。男の示す性向として並べられる, “sullen in my study”, “rough through the ardour of my nature”, “his passion for adventurous exploit”, “his soaring ambition” に対して, Elizabeth は, 持ち前のやさしさと慈悲深さでもってそれらを “subdue” し, “soften” する役割を果たす。彼女は「家庭の天使」の規範にぴったりとはまっていると言えよう。それをことさら印象づけようとする如くに, Elizabeth の天使のように霊的な力が強調されているのが, イタリクス部分の表現からわかる。Elizabeth は肉体性を消去され, 祭壇に祀られた灯火に, 天上人の眼差しを持った霊的存在になぞらえられるのだ。

女性の美德が, 男性の自己拡大への野心に対する手綱の役目を果たすこと, そしてその美德の発現にふさわしい場が家庭であること。1831年版における加筆では, 当時の中産階級に受け入れられていた, このような女性の生き方についての理念が前面に出ている。またこの章で考察している Victor と Elizabeth の関係について言えば, Victor にとって Elizabeth は, “more than sister” として, そして “possession of his own” として, 欲望と所有の対象であると同時に, 女としての肉体性を自ら顕にしない, いや, してはいけない存在なのだ。

Elizabeth の Victor への第一の手紙, Ingolstat で人造人間製造の後, 病に臥した Victor を気遣う手紙であるが, これも同じ趣旨によって書き換えられたものと考えられる。1818年版では, Victor のことを案じる

other; the voice of command was never heard amongst us; but mutual affection engaged us all to comply with and obey the slightest desire of each other. (1818, pp. 25-26)

この調和と平等を謳った部分は1831年版では削除される。また1818年版ではVictorとElizabethの性格を形容する言葉がしばしば入れ替えてもおかしくないような場合があり、二人の個性を際立たせるものとなっていない。そのような部分も1831年版では削除された。替わってElizabethの落ち着きと空想好き、自然への賛美に対して、Victorの知識への渴望、自然の隠れた法則への飽くなき関心が強調される。この書き替えによって、二人の違いに一貫性が生まれ、物語の進む方向をよりはっきりと示すこととなった。

Elizabeth像はどちらの版でも没个性的に描かれているが、先ほど見たように、1818年版では少なくとも、自分の“desire”を持ったVictorと対等の人間として扱われていた。ところが1831年版では、彼女は一個の人間としての輪郭を失う。そもそもがお伽話風の登場の仕方をしたElizabethは、天使の姿をした者として繰り返し表象されるのである(“a child fairer than pictured cherub” 1831, p. 34 など)。

生来の美德を身近の者たちに分け与えるという「家庭の天使」の影響力は、Victorの友人Clervalにまで及ぶ。次の一節のようなElizabethの影響力への言及は、1818年版には全くないものである。この加筆によって、Elizabethによる感化がなければ、VictorもClervalも自己制御力を失って、自己の情熱の虜となってしまうことが、鮮明になった。

The *saintly* soul of Elizabeth shone like a *shrine-dedicated lamp* in our peaceful home. Her sympathy was ours; her smile, her soft voice, the sweet glance of her *celestial* eyes, were ever there to bless and animate us. She was the *living spirit* of love to soften and attract: I might have become sullen in my study, rough through the ardour of my nature, but that she was there to subdue me to a semblance of her own gentleness. And Clerval

てそれは自ら創造した「物」であり、その生死の決定権も自分にあると思っているからだ。それゆえ人造人間自身の欲望を彼は認めようとしなかった。その主体性の否定は Elizabeth への態度に通じるものである。

さらに、人造人間の肉体に対する憎悪についても共通するものがある。手掛かりに、彼によって殺された Elizabeth の死体の描写を見てみよう。それは、あたかも人造人間製造の現場を連想させるものである。

She was there, lifeless and inanimate, thrown across the bed, her head hanging down, and her pale and distorted features half covered by her hair. (1818, p. 165/ 1831, p. 189)

Muriel Spark はこの部分を、人造人間製造の現場と共に、Shelley の文体の、感傷を抜きにした力強さを発揮している例として挙げている⁽⁷⁾。死んだ Elizabeth の姿態は、当時流行ったフュースリの「夢魔」に着想を得たものだという指摘もある⁽⁸⁾。確かに、その絵の中の、青ざめてのけぞっている女性のように、いかにも官能的なポーズで彼女は身を投げ出している。生きている Elizabeth の肉体が、これほどの即物性をもって描かれることはなかった。生存中の彼女の、女性としての肉体は、終始否定されるべきものとして存在していたように思われる。その意味でも、一見したところ美醜の対極にいる Elizabeth と人造人間は、共にその肉体を忌避されるものとして、相通じる存在なのだ。

違いは、人造人間からの逃亡と、後の追跡の過程で、Victor が人造人間と強い絆で結ばれてゆく点だ。その点で二人の関係は、憎悪によって繋がれているとは言え、愛していると言いながら曖昧な Elizabeth との関係よりもずっと濃密なものとなるのである⁽⁹⁾。

Elizabeth と Victor の幼年時代の話に戻ろう。1818 年版での Elizabeth と Victor の関係は、一度は前述したように小動物とそれを世話する者という比喻で語られるが、その後は二人が対等の関係を保ちながら育ったことが述べられる。

Neither of us possessed the slightest pre-eminence over the

which she stood to me — my more than sister, since till death she was to be mine only. (1831, p. 35)

語りのこの時点で、Elizabeth が Victor の未来の妻となることを曖昧に示唆するのは、物語を進める上で、読者の興味を惹くのに効果があるろう。さらにこの部分は、“she was to be mine only” と過去形で語られることによって、既に死が Elizabeth を奪っていったのではないか、しかもそれは恐ろしい出来事によってではないか、という予測を読者に与えて、ゴシック小説風のサスペンスを生み出す。が、Victor の言葉の曖昧さが伝えるのはそれだけではない。

この表現は、後に徐々に明らかになる Victor の Elizabeth に対する屈折した態度を暗示してもいる。自分の所有物と見做し、その女性としての肉体性、他者性を忌避するという Victor の態度が、二人の関係を敢えて明言しないその曖昧な言葉遣いに見て取れる。さらに、後の Victor の語りからは、彼が Elizabeth に真摯な愛情を抱いていると言いながら、絶えず Elizabeth との結婚から逃げようとしているような印象を受ける。結婚によって、女性として、他者としての肉体をもった存在である Elizabeth と正面から向き合うのを、避けているように思われるのだ。初夜の契りが結ばれる前に人造人間は彼女を殺害する。肉体の合一は遂に果たされなかった。Elizabeth は Victor にとって、妹以上ではあっても妻未満、の存在に終始したのである。

Victor は Elizabeth に対し、所有者としての意識を持ち、他者としての Elizabeth、自らの欲望をもって行動する精神と肉体を持った人間としての Elizabeth から逃亡した。いやむしろ、Elizabeth にそのような主体性があることすら意識されていないのかも知れない。この点については後の章でより詳しく論じるつもりであるが、ここで注目したいのは、Elizabeth と人造人間の平行な関係である。つまり、Victor の Elizabeth に対する態度と人造人間に対する態度の類似である。一方は Victor に愛され、他方は憎悪されるというのに「類似」とは、またもや突飛なようだが、Victor の両者に対する態度には、共通性があると思われるのだ。

まず、Victor にとっては人造人間も所有物である。なぜなら彼にとっ

seriousness, interpreted her words literally and looked upon Elizabeth as mine — mine to protect, love, and cherish. All praises bestowed on her I received as made to a possession of my own. (1831, p. 35)

Elizabeth は 1818 年版では、Victor の父の妹の娘という、はっきりした関係性の中に位置する存在であったが、1831 年版では、お伽話のお姫さまのような現実離れした存在として登場する。そんな Elizabeth を Victor は自分の所有物と見做すようになる。作者 Shelley が、理性に基づく男女の平等を唱えた Godwin と Wollstonecraft の娘であり、また自由意志による男女関係を理想とした P. B. Shelley の妻であったこと、Mary が彼らの著作に精通していたことを思えば、ここに表されたような、ひとりの少女を所有物と見做す発想は、批判の対象となるのかもしれない。ただ、彼らと Shelley との関係は複雑で、単純な影響関係に帰することはできない。しかしここで作者の伝記的背景を持ち出すまでもなく、Victor と Elizabeth の関係が、既に最初から所有する者／所有される者としての関係であったこと、Victor が Elizabeth を一個の主体性をもった他者として認めていなかったことは容易に窺われる。

1831 年版の Victor は、Elizabeth のことを繰り返し “my more than sister” と呼ぶ。この表現は 1818 年版では Elizabeth が Justine に対して使っているが (p. 66)、それは 1831 年版では削除されている。替わって Victor がこの表現を使う時、それは男女の関係を示唆する。勿論、二人は物語の後半で結婚式を挙げることになるのだし、死の直前の Victor の回想においては全ては過去の出来事なのだから、子供時代を回想する時に、長じてからの二人の関係に触れても全然おかしくはない。だが、Elizabeth を単に愛くるしい少女として描くにとどまっている 1818 年版と比べてみる時、1831 年版では、Victor にとって Elizabeth という存在の意味は、より複雑な様相を帯びているのがわかる。

それにしても “my more than sister” とは意味深長な表現ではないか。

No word, no expression could body forth the kind of relation in

人間の生まれつきの差異の絶対性は、1831年版で Elizabeth 像が変更されることによって、より強調されることとなり、それに伴って人造人間の社会からの疎外は、より決定的なものとなった。彼の自己教育の過程は、まるで人格形成の物語のパロディである。涙ぐましい努力の果てに、彼は、自分が人格形成などすべき存在ではなかったことを知ってしまうのだから。

II

前章においては、Caroline 像と、幼い Elizabeth が見いだされた時の描写についての変更が、物語全体に対して持つ意義を考察した。この章では、これもかなりの書き換えがある Elizabeth 像を中心に論を進めよう。特にここでは、「家庭の天使」が物語の主人公である Victor に与える影響に注目したい。

1818年版での幼い Elizabeth は、Victor によって小動物に喩えられている。彼女は“gay and playful as a summer insect”であり、そんな彼女を Victor は“a favourite animal”のように世話し、可愛がった。これらの表現には、所有者とその愛玩の対象となる者との関係が見て取れる。しかし1818年版では、幼少時代の Elizabeth と Victor の関係について、これ以外に暗示的な言及はなく、“From this time Elizabeth Lavenza became my playfellow, and as we grew older, my friend” (1818, p. 20) と、あっさり片付けられている。二人の関係に屈折したところがあるようには思われぬし、ましてやそこに性的な匂いは感じられない。

それに対し1831年版で、Elizabeth が初めて Victor の前に現れる前後は数ページにわたって書き換えられているのだが、Elizabeth その人よりも、Victor の Elizabeth への接し方が興味深い。

On the evening previous to her being brought to my home, my mother had said playfully, ‘I have a pretty present for my Victor — tomorrow he shall have it.’ And when, on the morrow, she presented Elizabeth to me as her promised gift, I, with childish

には、つながりがあるか。この命題は今、次のように言い換えることができる。即ち、Caroline-Elizabethの守護する家庭と、人造人間を拒絶する社会とが同質のものであるとは考えられないか、と⁽⁶⁾。

先の引用をもう一度見てみよう。Elizabethについて用いられた“species”という語は、後にVictorが人造人間製造の際に用いる語だ。Victorにとって想像の中の人造人間は“a new species”であり、彼はその父となり、子の祝福を受けることを夢想する。しかし現実動き出した人造人間は正視できないほど醜かった(“Oh! no mortal could support the horror of that countenance” 1818, p. 40/1831, p. 57)。

なぜ醜いというだけで、自分の創造したものをそれほどまでに憎悪するのか。そこにVictorの人間性に関わる欠陥があるのは確かだ。しかし問題はそれだけではない。先ほど指摘したイデオロギーと関連づけて考えるならば、ちょうどElizabethが、その美しさゆえに同じ種族と見做されて、Carolineによって選び出されたのとは対照的に、人造人間はその異形ゆえに、同じ種族と見做され得ず、人間社会から排斥される運命にあったのだと言える。

人造人間は、正視できないほど醜いがゆえに排斥される。これは当たり前のように、当たり前ではない。人造人間は社会に受け入れられるために非常な努力をするのだが、彼が自らに課した自己形成のための教育は、彼個人の内にあっては目覚ましい成果を上げるにもかかわらず、社会の閉鎖性、排他性の前には無力である。De Lacey家から酷い仕打ちを受けた後、Victorの故郷をうろついていた人造人間は、Victorの弟Williamと偶然出会う。その時、彼は無垢な子供ならば醜さに対する偏見を持たないだろうとナイーブに期待するのだが、実際にはWilliamは、父Alphonseの名を出して脅しながら、罵倒するのである。ElizabethとJustineという天使のような女たちによって育てられた、天使のような子Williamが、人造人間を拒絶するのは、「家庭の天使」の価値観から見て当然であった。しかしこの場面を、読者は人造人間の語りによって知る。そして彼の側からこの出来事を見ることになる。するとElizabethたちの信奉する価値観が、人造人間自身の味わう排除される者の苦悩など全く考慮に入れていないのが明らかになるのだ。

sweetness that none could behold her without looking on her as of a *distinct species*, a being heaven-sent, and bearing a celestial stamp in all her features. (1831, p. 34, イタリクス筆者)

Elizabethの外観は、生れつき秀でた内面の発露として詳細に書き込まれている。ただしその描写は、お決まりの金髪・広い額・澄んだ瞳・感性の豊かさを示す顔立ちといった、没個性的な美少女像を作り上げるにすぎない。しかしElizabethがこのように高貴な生まれの少女のイメージでステレオタイプ化されることによって、彼女がFrankenstein家に拾われる経過がかえって説得力を持つようになる。即ち、彼女のもって生まれた美質は彼女個人に属するものではなく、彼女の属する種族(“species”)の美質であり、彼女は元々貧農とは異なった種族の者として、当然選出されるべき存在であったと見做されるのである。引用文中、イタリクスにした表現からもElizabethの異質性が強調されているのがわかる。読者は、お伽話の美しいお姫様が逆境から救出されるのを期待するように、Elizabethが救われるのもすんなりと受け入れられる。

要するに、Elizabethと他の子供達の生れつきの差異が強調され、さらにElizabeth像がステレオタイプ化されることによって、Elizabethを養女にすることは、Elizabethを自分たちの「種族」の一員に戻してやる行為として、読者に容易に納得されるようになる。つまりElizabeth像のステレオタイプ化が、Carolineの行為の正当化を促しているのだと言えよう。

このように見てくると、一見些細に思われる女性像の書き込みは、1831年版テキストにおいて、人間の生まれつきの差異の絶対性、そこから導かれる富裕階級の道徳的優越性、階級区分の必然性というイデオロギーを補強する方向に働いている。彼女たち家庭の天使が「生来の」美德として一身に体現するものは、女性の本質ではなく、上に挙げたようなイデオロギーを支える価値観なのである。それゆえ、彼女たちの守護する家庭が示す自己充足性、閉鎖性は、彼女たちの生きる社会の排他性の縮図でもある。

ここで先ほど提出した問題に戻ってみよう。ElizabethがCarolineによって選出されることと、人造人間がその醜さゆえに拒絶されることの間

abeth だけに善行を施すのは心の狭い料簡であるといった読み方を促すものではない。あくまでも、Elizabeth の美しさに魅かれた Caroline が、彼女らしい “benevolence” から Elizabeth を救ってやった、と読ませるのである。しかし、そのような読み方から一步退いて考えてみれば、Caroline が具現する “benevolence” の背後にあるものが見えてこないか。即ち Caroline は、本来なら自分たちと同じ階級に属していなければならない Elizabeth が、貧困家庭に置かれていることを不本意に思い、そこから抜け出させて、帰属すべき階級の環境においてやったのだとも考えられるのではないか。貧農の子供達の中で Elizabeth だけを特別扱いするのを当然のことと見做す背景には、このような見方が前提としてなければならないだろう。

このように、Caroline の “benevolent” な行為は、各階級の人間には本質的な差異があるという考え方に基づいて行われているわけである。貧農の子供達は、体は逞しいが、生来道徳的に劣っていると見做される。

「苦しむ者に手を差し伸べる守護天使」と呼ばれる Caroline は彼らを忌避し、「生来の」美德を身内から輝かせている Elizabeth に救いの手を差し出すのだ。

突飛なようだが、このことは、人造人間がその醜さゆえに拒絶されることと軌を一にしていまいだろうか。この問題について考えるために、まず醜さの対極にある Elizabeth の美しさについて、その描かれ方をみてみよう。1818 年版では、幼い頃の Elizabeth の容姿への言及は、わずかに Caroline が「見たこともないほど美しい」と言ったことと、Victor が彼女の目と軽やかな体つきに触れているのみである。それが改訂後は、容姿の特徴が入念に説明される。

She appeared of a *different stock*. The four others were dark-eyed, hardy little vagrants; this child was thin, and very fair. Her hair was the brightest living gold, and despite the poverty of her clothing, seemed to set a *crown of distinction* on her head. Her brow was clear and ample, her blue eyes cloudless, and her lips and the moulding of her face so expressive of sensibility and

育を進んで引き受けたのは Caroline ではなく Alphonse であって、彼の慈悲心と迅速な行動力が強調されている。

それに対し 1831 年版では、Elizabeth は、Caroline が慰問に訪れた貧農の家に預けられていたイタリア貴族の娘という設定に変わっている。むさくるしい家の中で、ひとり場違いな輝きを放っていた Elizabeth を、惨めな境遇から救うべく、Caroline は養女として迎える決心をするのである。Victor の語りは Caroline の慈悲深さを強調し、“the guardian angel to the afflicted” という表現を用いている。有閑階級の女性が貧しい家庭を慰問するのは、当時広く行われていた。それは女性の美德によって社会に影響を及ぼすことのできる慈善行為として認知されていた。それゆえ、この Caroline 像が、1831 年版当時の社会において有閑階級の女性のあるべき姿を表しているだろうことは、容易に察しがつく。そこで考えてみたいのは、この大幅な加筆が、よりいきいきとした Caroline 像を読者に提供しているだろうかという点である。この加筆によって、確かに Caroline には、よりはっきりとした輪郭が与えられた。しかしそれは「家庭の天使」という限られた表象の内に彼女の姿を留める事となった。加筆することによって人物像がより詳しくなり、奥行を増したかと言えば、その反対で、一層ステレオタイプ化された女性像を創り出す結果となっている。

そればかりではない。この書き換えによって、1818 年版にはなかった要素が加わった。問題にしたいのは、Caroline が貧農の実の子を救うのではなく、彼らにはない気品と美しさを備えた貴族の娘を選び出して、その境遇から救ってやるという点である。Caroline 自身が豪商の娘として生まれたにもかかわらず、貧困に苦しみ、その境遇から Alphonse によって救い出されるという経験をしたことを考え合わせれば、彼女が Elizabeth にしてやったことは、自然な行為とも考えられよう。しかし、貧しい境遇にいるのは他の四人の “dark-eyed, hardy little vagrants (1831, p. 34)” と表現された子供達とて同様である。それなのに何故、その子たちではなく、Elizabeth を救うことが、Caroline にふさわしい徳行と見做されるのか。

もちろん、あひるの群から一羽の白鳥を救い出す類の話は世にたくさんある。それに、Victor の語りは、母の行為が単なる気紛れだとか、Eliz-

が母親自身の美德に触発されたものであると説明する (“There was a show of gratitude and worship in his attachment to my mother . . . for it was inspired by reverence for her virtues”, 1831, p. 32)。しかし同時に、母は父によって、まるで温室に育つ珍しい花のように手厚く庇護されねばならなかった (“He strove to shelter her, as a fair exotic is sheltered by the gardener, from every rougher wind”, 同上)。ここに浮かび上がるのは紋切型の「家庭の天使」的な妻像である。生来の美德を備え、その美德によって男性に影響を及ぼすことができる反面、夫によって厳しい社会の現実から隔離され、家庭の中で守ってもらわなければ生きていけない、か弱い存在である。温室育ちの花が庭師に世話されてはじめて開花するように、生来の美德を惜しみなく周囲に振りまくためには、男によって愛情を注ぎ込んでもらわなければならない、そんな女のイメージが鮮明になった。

このような書き換えは、恐らくは作者が当時の読者に受け入れられやすい女性像への変化を狙ったものかもしれない。時は19世紀も半ばに近づき、1818年版が世に出た頃と違って、社会の保守化傾向著しい時代であったから。しかしこの書き換えが Shelley 自身の思想をどこまで正確に表しているかとなると、簡単に答えを出すことはできない。彼女が本気でこのような女性像を理想としていたのか、それとも当時の一般読者への同調の身振りにすぎないのか。或いは、暗に家父長制への批判を込めて、そのような女性像を描いたのか⁽⁵⁾。しかしここでは、Shelley の動機を探るといって、興味深い推測は控えておこう。この小論の意図は、書き換えの動機が何であれ、その書き換えが物語全体の読みに与える変化について考えることなのだから。

このような観点から見て、Caroline に関する書き換えの中で、最も面白い問題を孕んでいるのは、Elizabeth を養女にすることになった経緯であろう。その件には大幅な変更が加えられている。

まず1818年版では、Elizabeth は Alphonse の妹の娘ということになっていて、Elizabeth の母の死後、父が再婚するにあたって、娘の養育を亡き妻の兄に求めてきたという設定になっている。この成り行きは珍しいものではなく、さほど読者の印象に残るものではない。また Elizabeth の養

るのではないか、という問題意識をもってそれらを検討しようというのが、この小論のねらいである。以上の趣旨から、ここでは主に、女性像、Walton 像、Victor 像の順にその変質の仕方を考察していきたい。

I

先に挙げた Butler のリストは、女性像に関して Elizabeth の法体制批判以外には触れていない。また、改訂の趣旨自体を問題にしている他の批評も、女性像の書き換えにさほどの注意を払ってこなかったように思われる⁽⁴⁾。しかし、1831 年版の改訂で、その様相を著しく変えたのは、女性の描き方である。それは、単に女性人物像の変化にとどまらず、男性登場人物への読者の眼差しをも変化させることになったと考えられる。そこで I・II 章では、Caroline と Elizabeth に関する変更箇所を具体的に検討することによって、加筆修正がもたらした女性像の変質と、それが小説全体の読みに与える影響について考えることにしよう。

まず、Victor が語り始める生い立ちの物語において、1831 年版では彼の母 Caroline への言及がはるかに詳細になっている。Victor の父 Alphonse の友人の娘という設定に変わりはないが、二人の結婚後の生活について、幾つか目立った変更があり、そのどれもが Caroline の家庭における役割を大きくする方向に働いている。以下、それぞれについて検討していこう。

そもそも Caroline の出番というのは、1818 年版ではほとんどない。Victor の語りの冒頭、経済的に苦しくなった父に寄り添って、良家のお嬢さんながら、貧困の中で父の死に水を取った、けなげな女性という紹介は、両版に共通する。だが Alphonse と結婚してからの彼女が自らの意志を積極的に示すのは、1818 年版ではわずかに、養女となった Elizabeth を将来 Victor の妻とする決心をしたことぐらいだ (1818, p. 20)。

しかし 1831 年版では、結婚後の Caroline 像がずっとはつきりした輪郭をもって描かれている。夫婦の仲睦まじい様子を描く際にも、妻の重要性が強調される。Victor は父の母への深い敬愛の念について語る時、それ

洗練された。

2. Victor, Walton, Alphonse の人物像がより共感できるものとなった。特に Victor はより強く自責の念を感じている。
3. Victor の教育について、Frankenstein 家の科学への無知が強調され、父親は Victor の科学への関心を誘発した責任を免れる。
4. Victor の人物像が、科学者らしさを抑えられ、理想を追求するロマン主義的人物像へと変貌した。それによって好感の持てる人物となった。
5. Victor の宗教的感情が明確にされた。キリスト教的な良心を与えられた。また彼の目を通して描かれる自然も神聖視されるようになった。
6. 科学に関する部分は削除ないしは否定的意味を付与された。
7. Elizabeth を従妹から他人に、また Victor の弟 Ernest を病弱から健康な子に変更するなどによって、近親相姦と貴族の家系の肉体的な脆弱さを想像させる要素を除いた。
8. Elizabeth の 2 箇所にあたる Godwin 的な法体制批判が削除された。
9. Clerval の植民地行政に関わりたいという希望が加えられた⁽³⁾。

Butler は 1831 年版での変更箇所について、以上のようにまとめている。この 9 項目については、特に人物像の変化について首肯しかねる判断を下していると思われる箇所があるが、それらについては本論の中で順次明らかにしていきたい。また、Butler のリストでは 8 でわずかに触れられているにすぎない Elizabeth と、全く言及していない Victor の母 Caroline に関する加筆や書き換えは、1831 年版を 1818 年版から隔てる非常に重要な要素であると思われるので、詳しく論じたい。なお上の 4・6 に関連して言えば、Butler は 1818 年版を当時の科学の状況を如実に反映している作品として重要視している。しかしこの小論では人物像の変質にテーマを絞って論じたいので、科学の扱い方については、人物像に関わる事でない限り、ここでは取り上げない。

Butler がここでまとめているのに類した両版の異同の個別的な比較は、これまでに散見される。しかしそれらの中で、1831 年版での加筆修正が、どういう方向性を持っているのかを、全体的に捉えた議論が十分になされているとは言えない。そこで、個々の書き換えに共通する意味の変化があ

Mary Poovey は、その著 *The Proper Lady and the Woman Writer* の中で、Shelley が 1831 年版を出すまでに辿った人生と時代の変化に触れている。Poovey によれば、1831 年版の時点で Shelley は、多難な人生での経験と社会情勢の変化が彼女に及ぼした影響のために、20 歳にもならぬ頃の手になる 1818 年版に、大きく手を加えざるを得なかった⁽²⁾。この Poovey の議論は、作品が、Shelley の作家としての立場と、それと必ずしも相容れない女性としての立場を反映しているという観点から、改訂の意図を探るものである。その議論は示唆に富むが、これは作者の心理を、テキストの一部や、時代精神、伝記上の事実から推測し、そうやって推測した心理の反映として作品を読み解くという方法である。この小説が、技巧に磨きをかけた作家の手によるものではなく、著名な文学者サークルの中で育った少女が初めて書いた長編小説であること、フランス革命後の社会と思想の激しい変化の時代に書かれたこと、初版執筆当時、強烈な人生経験のただ中であって、すでに母親となっていたこと、このような理由から、*Frankenstein* 論はしばしば上述のようなアプローチで解釈されてきた。このような方法では、テキストはあくまでも作者の心理の反映として捉えられ、テキストの解釈より、作者の精神世界を照らし出すことの方に重きが置かれていることが多い。

Shelley のように波乱に富んだ人生を送った作家にあっては、確かにその生きる姿勢自体が興味深いので、このようなアプローチに異論はない。だが、この小論では作者よりもテキストに光を当てるのが目的である。そこで、ここでは 1831 年版においてなされた加筆修正が、テキストにどのような意味の変化をもたらしたかを検討するという、テキストの読みに徹した方法を採用ことにする。そのような方法を通して、1818 年版から 1831 年版への作品の質の変化を明らかにしたい。

Oxford World's Classics の 1818 年版を編集した Marilyn Butler はテキストの後に 1831 年版との異同箇所を列挙しているが、その際にそれらの特徴を 9 種類に分類している。ここに簡単に紹介すると、1831 年版では、

1. Victor と Walton の内面をより詳しく描いている。特に冒頭部分が

Frankenstein 1831 年版に何が起こったか — 改訂がもたらす物語の変質について —

野 口 祐 子

序

Mary Shelley の筆になる *Frankenstein* は 1818 年に出版されたが、その後 1831 年に、Colburn and Bentley 社の Standard Novels シリーズ中の一作に加えられることとなった。その際、新たに作者の序文が付けられたのだが、その最後の部分で、Mary Shelley は改訂のことにさりげなく触れて、以下のように述べている（以下、Mary Shelley については夫 Percy と区別する必要のある時以外は Shelley と表記）。

I will add but one word as to the alterations I have made. They are principally those of style. I have changed no portion of the story nor introduced any new ideas or circumstances. I have mended the language where it was so bald as to interfere with the interest of the narrative; and these changes occur almost exclusively in the beginning of the first volume. Throughout they are entirely confined to such parts as are mere adjuncts to the story, leaving the core and substance of it untouched.⁽¹⁾

ただし、作者のこの言葉は鵜呑みにできない。確かに、ここに言われているように、改訂箇所は主に作品冒頭に集中している。しかし、それらは表現のしかたを変更したものにすぎないという作者の言葉にもかかわらず、1818 年版と 1831 年版とを比較してみると、単なる 'style' や 'adjuncts to the story' の変更として済ますことのできない異同がみられる。しかもそれらの異同はこの小説の中心テーマにかかわるものであり、ある一定の方向性を持った意味の変化を生み出していると思われるのだ。